

『千人別』

「最後の晩餐」といえば、レオナルド・ダ・ヴィンチの作品が有名だが、数えきれないほどの画家が、この場面を描いている。

手法も作風も皆、千差万別。

インターネットの世界では、情報の価値は「千人別」。



「最後の晩餐」 マールテン・ド・フォス

PSPED BITS

『地域紙の再生と心聞配達』

2月に復刊した地域紙がある。つくば市、土浦市を中心とする茨城県南13市町村で展開する常陽新聞だ。昨年8月で廃刊となった旧・常陽新聞新社が保有する題号「常陽新聞」をベンチャー企業が買い取り、地域密着メディアの再生を目指す新・常陽新聞社を立ち上げた。経営破綻した地域紙が再生できるのか。常陽新聞の先行きに業界の注目が集まっている。

配布対象区域内の人口は103万人と多く、つくばエクスプレス開通後の開発で若者世代、子育て世代も比較的多い。当初の発行部数は3千部だが、まずは1万部以上を達成して日本新聞協会に再加盟し、政府広報、自治体広報の掲載で収入構造の安定化を図ることだ。

輪転機の廃止、輸送の外部化などのコスト圧縮策はベンチャー経営者の得意とするところだが、経営難に苦しむ旧社体制下で給料の遅配があっても支えてきた地元記者に可能性を感じ、生活密着の地域紙を目指すところに、その辺にいるベンチャー経営者とはひと味違う志を感じる。今後は生活圏の異なる常磐線沿線とつくばエクスプレス沿線とを別版にする方針とのことだ。生活密着への強いこだわりが窺える。

既にタブレットやスマートフォンで読める「電子版」の提供も始めており、今後の発展が期待される。抽象論がふわふわと渦巻くネットメディアの現状において、足下の現実に即して拾い集めた情報を、当事者目線で翻訳して発信する地域密着メディアの成功は、今後の教育や政治、オープンガバメントなどの将来にも大きな役割を果たすと思う。

新聞の将来について考えていると、いつも新聞配達のお兄ちゃんの顔が頭をよぎる。僕が幼い頃に過ごしてきた四国の田舎の新聞には、いつも東京の住み込み新聞配達アルバイトの求人広告が掲載されていた。出世を夢見て東京に出てきた若者は、朝2時に起きて新聞を配達するだけでなく、昼間は見知らぬ土地で新規開拓営業に汗を流す。彼らはこうして日々の仕事をとおして地域の人たちに受け入れられながら生活基盤を整え、新たな人生へと旅立ってきた。新聞配達人が育てる職場を提供してきた意義は大きいと思うし、いま増加している独居老人の見回り機能として期待する声も少なくない。いま必要なのは、心を拾い届ける心聞配達の仕事ではないか。そんな気がしてならない。



佐谷宣昭 Nobuaki Satani
1972年生まれ。九州大学工学部建築学科卒業。2000年九州大学大学院人間環境学専攻博士課程修了、博士（人間環境学）。翌月起業。株式会社パイブドビット社長CEO。明日の豊かな情報生活に貢献したいとの想いから、「情報資産の銀行」の必要性を説く。官公庁や都市銀行、小売業など10,096の事業者向け情報資産プラットフォーム「スパイラル(R)」を提供中。
株式会社パイブドビット
東京都港区赤坂2丁目9番11号
03-5575-6601(代表) <http://www.pi-pe.co.jp/>